

令和5年度 奈良市立伏見南幼稚園

研究実践概要

園長名 上島 三佐子
全園児数 23名

1. 研究主題 「心ときめかせ 主体的に活動する子どもをめざして」
～人・もの・こととの出会いの中で～

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

子どもを取り巻く環境が日々変化中、本園は園児数減少や昨年度までの感染症対策等もあり、人との関わりが希薄で、生活経験や感動体験も少なくなりつつある。身近な“人・もの・こと”との関わりの中で、心ときめく豊かな体験をし、友達と思いを出し合い葛藤や挫折を乗り越えたり、達成した喜びを味わったりすることなどを積み重ねることが大切であるのではないかと考える。園生活の中で、子ども達の心ときめく姿を捉え、主体的に活動する子どもを目指すために保育内容の見直しや工夫、保育者の援助や環境構成の在り方を探っていきたいと考えた。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもが遊び、生活する中で、心ときめく瞬間を捉え、主体的に活動するための保育内容や援助、環境構成の在り方を探る。

②研究の重点

- ・子どもの実態を把握し、課題を明らかにするとともに研究主題について共通理解をする。
- ・子どもが遊びや生活の中で、主体的に身近な人・もの・ことと関わり、直接体験を積み重ねることができる保育内容の工夫や援助の在り方を探る。
- ・遊びや活動の中でわくわくする気持ちをもつなど、子どもの心が動いた要因を探り、学びが深まるような環境構成や援助の在り方を探る。

③活動の方法

【事例1】4歳児「あわあわができた」(9月)

ねらい ○自分なりに遊びに必要な物を用意したり、選んだりして遊ぼうとする。

○気の合う友達と自分の思いを出しながら遊ぶことを楽しむ。

(環境構成..... 保育者の援助____ 心がときめく瞬間____)

様々な形のカップなどを子ども達の取り出しやすい、テーブル横のワゴンに準備しておいた。すると、それを見つけたA児とB児が「泡遊びしよう」と誘い合い、「泡遊びに使うものは…」と、A児が使うものをB児に知らせながら、「一緒のカップを使おう」「いいね」と2人で全く同じ用具を用意して遊び始める姿があった。新しい容器を見つけると、「これも使おう」「じゃあ、私も」と、2人で同じ用具を使うことに“一緒だね”という嬉しさを感じているようであった。その姿を見て、「2人で一緒っていいね」と、笑顔で話しかけた。

次の日、A児とB児は、また一緒に泡遊びを始めた。昨日とは違い、B児は自分で「私はこれ使いたいな」と、自分なりに必要な用具を選んで、遊び始めた。A児がB児の様子を見て、「いいね、またできたら見せて」と話すと、「わかった、あわあわできるかな」とB児も嬉しそうに答えた。2人のやりとりをそばで見守



っていると、2人はできた泡を嬉しそうに保育者に見せに来て、「先生、あわあわができたよ」と伝えたので、「ほんとだ。2人一緒にあわあわだね」と2人の気持ちを受け止めた。隣で遊ぶ友達の存在を感じながらしたい遊びを存分に楽しんでいる様子が見られた。

<反省・評価>

- ・泡遊びでは、必要な用具を使いやすいように分類したワゴンを、子どもの目の付く場所に置いておいたことで、自分なりに必要なものや用具の形や大きさ、数が分かったり、用意したりできるようになった。また、友達と同じ用具を選んだことで“一緒にだ、嬉しい”という気持ちになった。子ども自身が自ら選べる環境が大切であると感じた。
- ・保育者が子どもの気持ちに寄り添い、互いの思いを受け止めたことで、友達のしていることに興味をもったり、友達のことを認め合ったりする姿へとつながり、自分の思いを出しながら遊ぶことができた。

【事例2】4歳児「おりがみ教えてほしいな」（1月）

ねらい ○自分の思いを伝え合いながら伝承遊びを楽しむ。

○地域の方に親しみをもったり、触れ合ったりすることを喜ぶ。

(環境構成_____ 保育者の援助_____ 心がときめく瞬間_____)

昔遊びの会で地域の方と一緒にコマやすごろくなどで遊ぶ機会をつくった。折り紙遊びの場所はリズム室の落ち着いた場所に設定し、幼児机を4台置き、すぐに使いたくなるように様々な色紙や折り紙の本を置いた。A児が「何して遊ぼうかな」と地域の方を誘い、折り紙を始めたところにB児も後ろからやって来た。B児は始め、好きなものを折り、「見て！」



とできたものを保育者に見せ、「すごいね、こんなの折れるの」と認められ、保育者とのやりとりを楽しんでいた。

地域のCさんに「おじさん、こんな折り紙折れるんだよ」と、見たことのない折り方の「船」の折り紙を見せてもらった。すると、「ぼくもやってみたいな」とつぶやいたB児に保育者が、「話しかけてみたら」と安心できるように笑顔で声を掛けると、初めての地域と方との関わりに少し緊張していたB児が「僕も教えてほしい！」と自分から伝えた。「よし、一緒にし

よう」と声を掛けてもらいCさんとB児は、折り紙の本を見ながら、一緒に折り紙を始めた。難しいところは手伝ってもらったり、できるところは見守ってもらったりして、何度も完成するまで2人で挑戦していた。最後には、B児は「折り紙教えてくれてありがとう」と話しかけて、「楽しかった、また遊ぼうね」と自分からAさんに笑顔で話した。保育者は「Cさん、折り紙上手だね。Cさんに教えてもらって折れて嬉しかったね。」と、B児が意欲的にCさんと関わり最後まで折れたことを笑顔で認めた。

<反省・評価>

- ・伝承遊びという互いに親しみのある遊びを通して、地域の方と触れ合い、交流しやすいような場を設定したことで、楽しさを共有することができた。B児は自分の知らなかった折り方を見せてもらったことで、おもしろそう、自分もやってみたいという気持ちが生まれ、積極的にCさんに関わり、一緒に過ごすことを喜ぶ姿へと変わった。身近な地域の人と触れ合うという直接体験を通して親しみをもって関わったり、いつも温かく見守られたりしていることを知ったりすることができた。
- ・保育者は、子どものそばで温かく見守り、思いを十分に受け止めたり、認めたりする声掛けをしたことで安心することができ、B児自ら地域の方と十分に触れ合い、親しみをもつことにつながった。

【事例3】5歳児「3人と2人やったらリレーできない」（10月）

ねらい ○友達と一緒にルールのある遊びや運動遊びに繰り返し取り組む。

○友達と思いや考えを出し合いながら、一緒に遊びを進める楽しさを味わう。

(環境構成_____ 保育者の援助_____ 心がときめく瞬間_____)

友達を誘い、リレーをしようと数名が集まり、運動会で使った用具を出して準備し始めた。A児が「色チームの方が多くて」と人数が揃わず困っていた。B児「でも昨日、色チームしたから、今日は白チームがしたいな」と話す。A児「でも、3人と2人やったら、できないやん」というと、B児は「私が色チームになっても、また、3人と2人やで。同じやん」となかなか始まらない。C児は「誘ったけど、誰も来てくれなかった」と困っていた。その様子を見守っていた保育者が「そうやってんね。他の友達はしたいことがあったんやね。どうしよう」と気持ちを受け止め「なんかいい方法ないのかな？困ったね。」と声を掛けた。

B児「もう一回誘いに行ってみる？」と言うと、C児「でも、もうみんな今日はしないって言ってたよ」A児「でも、3人と2人やから、勝負にならないやん」と、困った様子で話し合いが進まない。保育者が「運動会も人数違っていたね」とさりげなく伝えた。すると、D児が「運動会も人数違うかったけど、勝負したやん。だからできるんちゃう」と話し始めた。「そうやね。運動会の時は、つき組さん、11人だから、5人と6人でチームに分かれて勝負したもんね。今と同じやね」とD児の気付きを周りの友達にも分かるように伝えた。すると、A児が「そっか！運動会の時は、同じ数だけ走ったやん」と思い付いた。D児も「ほんとうや！同じ数にしたらいいんやん。じゃあ運動会の時みたいに12回(周)走ることにする？」と話す、B児「12は多いからいらんな」と伝えると、A児が「じゃあ、10にしたらいいんちゃう」と提案し、人数ではなく、10周で終わりのリレーが始まった。



<反省・評価>

- ・子ども達は、人数が揃わないとリレーの勝負ができないということにこだわっていた。ここで、以前の共通経験である運動会のことを思い出し、それをきっかけに、D児は人数が揃わなくても、勝負ができることに気付いた。そのことを保育者が認め、互いの意見を取り入れながら遊びを進められるように言葉を補ったことで、自分達でどうしたらいいか考えて取り組むことができた。経験を積み重ね活かすことの大切さを感じた。
- ・5歳児のこの時期は、子どもの思いを充分に出し合える場や時間、雰囲気が大切であり、保育者はそれらを保証すると共に、時には仲間になって子どもがアイデアを出しやすいようなさりげない援助や見守ることで子ども自ら葛藤を乗り越え納得し、友達と意欲的に活動する姿につながったと考える。

【事例4】5歳児「ここに並んでください」(12月)

ねらい ○小学1年生に作品展を観てもらうことに期待をもち、楽しんで取り組む。

○小学1年生との触れ合いを楽しみ、自分の思いや考えを相手に分かるように伝える。

(環境構成_____ 保育者の援助_____ 心がときめく瞬間_____)

チャレンジタイムで小学校の校庭を走ったことをきっかけに小学生にも園内作品展を見てもらいたいという子どもの思いがあったから、子ども達とポスターを届けに行った。その後、小学校の1年生の担任の先生より連絡があり、作品展の最終日に見学に来ることを子ども達に伝えると、「やった！」「すごいつくったから、ビックリするかもしれない」「1年生みんな来たら、幼稚園に入れるかな」と、子ども達は大興奮していた。

前日に、期待が膨らむように保育者が「明日は80人程来てくれるよ、楽しみだね」と伝えると、A児「電車にたくさん乗ったら壊れるかもしれない」と言ったことでどのように招待するか話し合おうということになった。B児「じゃあ、何人乗るか決めるのはどうかな」と実際に乗ってみることにした。子ども達が5人乗ると、慌ててC児が「そんなに乗ったら壊れるよ」と驚いた。A児が「じゃあ、3人にするのはどう」と提案した。他の子ども達も「いいね」「そうしよう」と、展示物の電車に乗る人数が決まった。

作品展当日、11名の5歳児の子ども達は、児童の多さに驚いてしまい、昨日張り切って

話していたA児も戸惑ったようにじっとしていた。作品展の会場（リズム室）に入ると、圧倒されてじっとしていた子ども達も少しずつ1年生と関わり始めた。そんな時に1年生の子どもが、電車の展示物を見て、「これって乗れるの？」とA児に尋ねたが、気付いていないようだったので、保育者は「Aちゃん、乗れるか1年生の友達が聞いているよ」と声を掛けた。すると、「乗れるよ」と小さな声で話し始め、「ちょっと恥ずかしい」と答えた。「乗れるの？乗ってみたいな」と1年生の子どもが言うと、じっとしていたA児が「ここから乗れるよ」と伝えたが、声が小さくて伝わらないようだった。A児の姿を見守っていると、隣にいたB児が大きな声で「たくさん乗ったら壊れます」と話したので、A児も少し大きな声で「ここから乗れます。順番に並んでください」と話し始めた。1年生の子ども達も「乗れるんやって、乗ってみたい」とやってきた。A児が「ここで待っていてください。たくさんは乗れません」B児「こっちは4人で、こっちは3人で乗ってください」と元気な声で話し始めた。「順番やって。ここで待つみたいやで」と、A児の話聞きながら、1年生の子ども達は順番に並び始めると、A児は笑顔になり、今まで以上に張り切って案内を始めた。

1年生の子ども達からお礼の手紙が届き、「また、1年生に遊びに来て欲しいな」「4月になったら小学校で会えるで、楽しみやわ」とA児もとびきり笑顔で友達に伝えた。

<反省・評価>

- ・コロナ禍が明け、小学校との交流の機会が少し増えた。小学校の施設利用の交流がきっかけになり、作品展に小学生を招待したいという気持ちが芽生えた。当日を楽しみにする中、どうしたら楽しんでもらえるかという共通の目的に向かって話し合う時間をもったことで、互いの考えを伝え合うことができ、小学生との交流がより楽しみになり就学への意欲にもつながった。
- ・初めは、自信がなかったA児の姿を見守っていると、B児が楽しそうに小学生を案内する姿を見て、自分にもできるかもしれないという気持ちの変化があった。どうしたら1年生に伝わるかを自分なりに考え、前日の話し合いを思い出し、元気に話し始めた。A児の思いが実現できるように保育者が先走らず、A児の姿を見守り、待ったことでA児自らやってみようという気持ちが高まり、意欲や達成感を味わうことにつながった。

5. 研究の成果

- 4歳児は、やってみようと思える素材や材料を身近に用意し、継続して遊べる時間の保障をしてきた。また、保育者が一人一人の思いを受け止め丁寧に関わっていくことで、自分の思いを素直に出せるようになり、好きな遊びを見つけて、友達と関わって工夫しながら遊ぶようになった。友達や身近な地域の方の存在に気づき、関わりを広げ、一緒に活動する充実感を味わい、主体的に活動することができた。
- 5歳児は、友達と一緒に遊びや生活を進める楽しさを味わってほしいと考え、話し合いの場や時間を多くもつようにしてきた。友達との関わりが深まり、心の葛藤、友達との気持ちの折り合い、また、互いの思いを共有し、仲間意識が高まっていった。保育者が子ども一人一人の姿を受け止め、認めていくことで「もっとうちでやりたい」「自分ならできるかもしれない」「こうしてみたい」と自信や意欲へとつながり、主体的に活動する姿になった。
- 子どもが主体的に様々な“人・もの・こと”に関わり、自分の思いを実現できるようにするためには、子どもの思いや必要に応じ、様々な場面において自分で考えて選んだり、友達と関わり思いを出し合って遊んだりできる環境を工夫すること。また、保育者は子どもの姿を丁寧にみとり、タイミングを逃さない援助を心掛け、心ときめく感動体験、直接体験を積み重ねていくことの大切さを感じた。

6. 今後の課題

- 保育者は、子どもの興味・関心を丁寧にみとり、“人・もの・こと”との出会いの中で、心ときめかせ、子どもが主体的に活動するための環境構成や援助の在り方を引き続き探る。その中で、保育者は子どもの発達段階や時期を考えた援助や環境構成、子どもの学びが深まるような保育内容の工夫に努め、保育者同士の同僚性を高めながら研究主題に迫っていきたい。